

教師夏目金之助の研究（七）

－その師弟関係－

森 下 恭 光

緒 言

本論によって、夏目金之助の師弟関係を学校における教師と生徒・学生の関係として、また、自宅で毎週木曜日の午後に催された「木曜会」における師とその門下生等との関係という二つの場面に分けて明らかにしたい。

学校における師弟関係についての論述は、彼が勤務した学校すべてについてではなく、愛媛尋常中学校、第五高等学校、東京帝国大学の3校に限定して行なう。

「木曜会」における師弟関係についての論述は、まず「木曜会」発会の経緯を明らかにした上で、夏目夫人によるその夫漱石に関する回想、門下生達等の「木曜会」に関する回想や書簡、記述を主な資料として明らかにする。

以上の二つの場面での夏目金之助の姿をとらえることにより、夏目金之助の教師としての姿はより立体的に浮きあがらせることができるのではないかと考える。

学校における師弟関係

漱石が夏目金之助として教師を勤めた学校における師弟関係はどのようなものであったかをそれぞれの学校で実際に指導を受けた者の追憶を基にして以下に明らかにして行く。

（1）愛媛尋常中学校時代

眞鍋嘉一郎⁽¹⁾は、4年と5年の2年にわたって英語の授業を受けた。テキストは『スケッチブック⁽²⁾』であった。講義をする時のようすは「机に凭れて両肘をつき、右手に鉛筆を持って、細々と講義を進めて行かれた。能弁とか達弁とか云うのではないが、非常に言葉の綾に富んだ話しぶりで、誠に明快を極め、熱心で正確で、其口吻が当時十七八歳だった自分の頭裡に刻せられて今だにありありと残っている⁽³⁾」という程、印象深いものであった。

また、眞鍋が医師を志望していることを知ると、教室で何か語義を解釈する時にはその語源の説明に加えて、ドイツ語を引き合わせた。

会話の時間では、初めから英語で話し、会話の要点として、まず肯定否定を聞きとることをあげた。作文についても、実に丁寧な指導し熱心に添削した。

眞鍋によって追憶される教師としての夏目金之助は以上のような姿を浮きあがらせる。このような印象を受けたのは眞鍋だけではなかったと推測される。それは、生徒間で「あんないい先生が松山なぞへ来たのは、道後の温泉がある故、保養少々教鞭をとるに過ぎま

いなぞと云われていた⁽⁴⁾」というからである。

生徒から見た夏目はこのようであったにもかかわらず、『坊っちゃん』の舞台とされる松山の中学（現在の松山東高校）における「坊っちゃん」と生徒との師弟関係がこれとは大きく異なるのは何故であろうか。眞鍋の追憶が事実であるのに対し、『坊っちゃん』に描かれているのはフィクションであるから事実とフィクションは比較すること自体が無意味であるということになるのであろうか。

松根東洋城⁽⁵⁾も同校で夏目に英語の指導を受けた。英語担当教師の夏目は、松根が評するところによれば、「英語教授法についても至れり尽せりで先生の学識が広く高かったからではあろうが、其事に従わるるや極めて忠実で親切でしかも生徒の智識脳力を量ってよく了解のゆく様によく納得するように教えられた。私などは特別に語学が好きと思う方でもなかったが、先生に教えて戴いてからは英語は面白いものだと思ひから感じ出した。会話など西洋人に教わるより先生の教えて下さる方がよ程面白くむしろ西洋人が教えても説明もしてくれないあるものを先生は我々に与えられた⁽⁶⁾」と評すべき教師であった。

つまり、松根も眞鍋同様に英語教師としての夏目を高く評価している。そして、生徒の夏目に対する態度も「謹厳で真面目な先生に対しては流石いたづらな生徒も毫も卑ずる隙を持つ事が出来なかった⁽⁷⁾」という。この点についても松根の追憶は眞鍋と一致している。

ただ、眞鍋の追憶になくて松根のそれにあるのは、愛媛尋常中学に見られた師弟関係に関するものである。松根は次のように追憶する。

「教師と生徒とは、よくごたごたしていた、生徒は教師に中々心服しない、通り掛かる教師を綽名に呼び立てるなどという事はありふれた事になっていた。ところが中々いたづらな生徒があつて、あらわに理窟をこねたり甚だしきに至つては授業時間前に机をすっきり積上げてしまつて一同をそそのかしてどっかへ隠れてしまひ授業も何も出来ない様にしたり、或は授業中に揶揄嘲笑到らざるなしという有様であつた⁽⁸⁾」

これによれば、先に疑問を呈した、『坊っちゃん』に描かれた中学の状況と現実のそれとの関係は、「坊っちゃん」を夏目に置き換えると現実には存在しなかったことになるが、「坊っちゃん」を松山中学の一般教師と仮定するならば、描かれているような師弟関係が現実に存在したということになる。

(2) 第五高等学校時代

明治29年4月に夏目が第五高等学校講師に就任した時、同校の3年生であつた速水滉⁽⁹⁾は、翌年まで1年間英語の授業を受けた。

テキストがパークの『フレンチ・リヴオリューション⁽¹⁰⁾』で難解であるため、学生は時々突っかったという⁽¹¹⁾。後日、この頃のことを話題になると夏目はその度に苦笑し「あの本は今君らが読んで見てもきっと六ヶ敷いと思うに違ひない。併し今僕に教えさせれば、君等をすっかり感服させるのだが⁽¹²⁾」といったという。

速水が夏目の講義で感銘を受けたのは、課外講義であつた。『ハムレット⁽¹³⁾』をテキストに使つたものであつたが、「この面白さは今だに印象に残っている⁽¹⁴⁾」と述懐し、これにより「私共には初めてハムレットの面白味がわかつたのであつた⁽¹⁵⁾」と付け加えている。

夏目の講義は厳格で快活なところが少なく、学生が下読みを怠ると厳しく注意するこ

ろがあった。また字義を質問する学生があると、それには取りあわず「そんなことは字書を引けば解る⁽¹⁶⁾」と突き放した。

このように厳格ではあっても「温味のある一風変った感じがあった⁽¹⁷⁾」と速水は追憶する。速水の夏目についての追憶で特色的なのは、高等学校の学生の立場から見ると、夏目という教師は特別の存在ではなかったということである。就任時は講師であったが7月には教授に昇格している。教師として学者として社会的評価の定まった夏目であっても、学生にとっては、それは大きな意味を持たなかったということである。

それは、前任校である愛媛尋常中学時代、生徒が夏目を見る目と大きく異なるところでもある。つまり、中学校教師と高等学校教師では、その教育対象が生徒と学生で異なり、それは個人差はあるものの教師に期待するものの程度の差となつてあらわれるということであろう。とも角、速水にとっては夏目は特別の存在ではなかった。

内丸最一郎⁽¹⁸⁾は同校の二部⁽¹⁹⁾の学生として夏目の英語を受講した。前出の速水と異なり、理科系の学生であった内丸は英語を得意としなかった。そのためもあり、夏目の厳格な講義を圧迫される心理状況で受けていた。当然、教師である夏目から見て学生である自分は「受けが余りよくないと信じていた⁽²⁰⁾」。

それにもかかわらず、内丸が学資に窮していることを同僚教授から伝聞した夏目は、内丸に大学卒業までの学資提供を人を介して申し出た。結局、学資は内丸の故郷の育英会から貸与されることになり、夏目による学資提供は不要になったが、このことを内丸は生涯忘れず、深い感謝の念を以て夏目を追懐する。

後日、この件について夏目に「あんな事を仰って下すつたが先生は御金持だったのですか⁽²¹⁾」と聞くと「いや御覧の通り貧乏だが、君一人位どうかならと思ったのさ。併しあの時出してやらないで惜しい事をした。そうすれば君は一生僕の前で頭が上らなかつたんだが⁽²²⁾」と笑ったという。

英語の講義ではジョン・ハリファックスの『ジェントルマン⁽²³⁾』とジェイムズの『オブ・イングリッシュ・ブローズ⁽²⁴⁾』がテキストに用いられた。この講義について内丸は「怖かったが、よく解る講義で、後者の方にあつたスコットランドの雪景を叙した文を得意で講義されたのを覚えている⁽²⁵⁾」と回想する。

また、課外講義を聴講した時のこととして、「課外講義だから仮名を付けるなど云われていたに係らず、復習の便利の為に付けていたところを見付けられ、叱られた上、『それじゃ君やってみ給え⁽²⁶⁾』と云われて、兎に角立ち上つて読んだが、それが箇人的に先生から物を云われた最初で、その時の怖さが先生の第一印象となつて了つたのであろう。暫らく私は厳しい先生とのみ思っていた⁽²⁷⁾」とも述懐している。

内丸にとって、夏目は、英語の教師としては厳しく怖い教師。人間的には感謝の念が湧きあがる慕しい教師であった。

(3) 東京帝国大学時代

松浦一⁽²⁸⁾は夏目がロンドン留学を終えて東京帝国大学講師に就任した時点から英文学の講義を受けた。その時松浦は1年生であった。

夏目は前任者である小泉八雲の後任として外人講師ロイド、上田敏と共に就任したので

あった⁽²⁹⁾が、前任者が高名な文学者であったのに対し、その時点では無名ともいってよい存在であったため、学生の中には失望して転科する者もあった。松浦も例外ではなく、夏目に期待するものは少なかった。講義が始まってその印象は大きく修正されることはなかった。「英文学形式論⁽³⁰⁾」は文学を形式と内容に分けて論ずるもので、非凡な学者であるとの印象を持つに止まった。

ところが翌年になって、文学の原論⁽³¹⁾も「F + f」の理論を導入する段階になると、学生達は「等しく驚異敬服して了った⁽³²⁾」という。

また、シェクスピアに関する講義は卓越したもので、講義の行なわれた二十番大教室は常に満員になる程、評判になった。

学生に対しては分け隔てなく接する教師で、松浦自身も、たまたま夏目と門を出る所で一緒にになり、別れ際に「お暇の時に伺いたい、と先生に云うと、来給え、今日すぐ来給えと云った調子で⁽³³⁾」自宅へ招かれたという。それは松浦に限ったことではなく、「正月の年始の時は、鳥渡行った学生にも吸物膳で屠蘇を馳走すると云った風の、ごく親しみ深い人であった⁽³⁴⁾」と松浦は述懐する。

しかし、そういう時期も長くは持続せず、とくに明治38年に入ると、1月に『吾輩は猫である』を発表した後は相次いで創作を発表し、心身ともに余裕のない状態に移って行く。もちろん、本務は教職であるから、学生に対する関係が急変し疎遠になることはなかったが、夏目自身の身辺の変化はやはり微妙に学生への対応に影響を与えたことは否めない。松浦はそのことを「大学に於ては、年月の経つに連れて、先生の態度がだんだん鋭くなって行ったようであった⁽³⁵⁾」と追想する。

野上豊一郎⁽³⁶⁾は、第一高等学校1年の時より夏目の講義を受けている。その講義が厳正極まりないものであったため、学生達は「厄介至極な語学の先生だと思っていた⁽³⁷⁾」。それにもかかわらず「皆何となく先生が好きであった⁽³⁸⁾」と述懐する。明治36年、野上は同室で講義を受けていた藤村操が下読みを2度怠ったため夏目が叱責したところ、2、3日後の5月21日に家出をし、日光の華嚴の滝に投身自殺をするという事件（明治36年5月28日付、大阪朝日新聞紙上に報道）に遭遇している。夏目はこの事件を自分が講義中に厳しく叱責したことが原因と考え悩んでいたという。自殺の原因が夏目の叱責にあったか否か不明であるが、語学教師として厳しく対処していたことをうかがわせる事例である。

次に野上が夏目の講義を受けるのは明治38年で、野上が大学に入学した年である。

受講したのは「十八世紀英国文学史⁽³⁹⁾」3時間と「シェイクスピア講義」が3時間である。野上自身は英文学史の方に興味を抱いたが、一般学生には「シェイクスピア講義」の評判が高く、先に松浦の追想で触れたとおり講義室の二十番教室は常に満員だったという。しかもその中には法科の学生も含まれていたということであるから、学内的に夏目の講義が評判になっていたことがわかる。

講義に対する学生の評価の高かったこの時期、夏目自身は心身両面で極めて不調であった。野上は「其頃の先生は生理的に醜悪を極めた時代で、大神経衰弱の絶頂であった。而して教室に於ける態度も、如何にも苦るしうであった⁽⁴⁰⁾」と観察している。

夏目の神経衰弱はロンドン留学中の明治34年に始まり、明治35年にはそれが強度になったため、一時は発狂が報じられた。明治36年に帰国後も神経衰弱はおさまらず、37年、38

年、39年とそれは一進一退しながら続くのである。野上が大学に入学したのは38年であるから、先に引用した野上の観察は彼一人の印象に基づくものではないことがわかる。

明治40年になると、夏目は第一高等学校、東京帝国大学、それに明治37年から兼任した明治大学の3校すべてを退職する。これによって夏目は教師夏目金之助としてではなく、作家夏目漱石として活動することになる。

夏目は、明治40年3月23日に、野上豊一郎に宛てて次のように書き送っている。

「世の中はみな博士とか教授とかを左も難有きもののように申居候。小生にも教授になれと申候。教授になって席末に列するの名誉なるは云う迄もなく候。教授は皆エラキ男のみと存候、然しエラカラざる僕の如きは、殆んど彼等の末席にさえ列する資格なかるべきかと存候、思い切って野に下り候。生涯は只運命を頼むより致し方なく、前途は惨憺たるものに候。それにも拘らず大学に嘯みついて、黄色になったノートを繰り返すよりも、人間として殊勝ならんかと存候。小生向後何をやるやら、何が出来るやら寸分分らず、只やる丈やる而已に候⁽⁴¹⁾」

この書簡は、朝日新聞への入社が決定した後に書かれたものであり、それは朝日新聞による生活保障を得た上での作家活動への専念を決意した後のものであることを考量するならば、自己の置かれた状況を過剰なまでに悲愴感を漂せて書かれたものであると考えなければならない。しかし、こうして夏目は教師生活に訣別し、作家生活へ入って行くわけである。

「木曜会」における師弟関係

「木曜会」⁽⁴²⁾とは、明治39年10月中旬より大正5年12月まで、漱石の自宅で催された漱石とその門下生達を中心とする者達との懇親の会を指す。主宰者は言うまでもなく漱石自身である。

この会が発足する契機になったのは、当時第一高等学校講師、東京帝国大学講師であった夏目金之助がペンネーム漱石として活動を始めていたため、教師と作家という二重生活による身の多忙という事情があったと考えられる。⁽⁴³⁾

明治36年4月に就任した東京帝国大学では6時間、第一高等学校では20時間の講義を担当し⁽⁴⁴⁾、教師として多忙であったが、翌年4月からは明治大学で講師を勤めるという負担が加わり更に多忙となった。これに作家活動が明治38年1月に始まる『吾輩は猫である』を代表として活発になって来るので、それらの質量ともに一個人にとっては過剰というべき負荷を消化していた時期であったことを考量するならば、当然の対応というべきである。

この間の事情を端的に示すものに漱石自身の書簡がある。明治38年9月24日、野間眞網宛に次のように認めている。

「小生日々来客責めにて何を致すひまもなく候然し来客の三分の二は小生にインテレストをもって居る人々だから小生の方でも逢うとつい話が長くなる次第⁽⁴⁵⁾」

これによっても、教師と作家の二重生活で多忙である上に、来客が頻繁に訪れ、多忙な生活を更に圧迫している日常がうかがわれるのである。

このばあい、対応の仕方としては、幾つかの選択肢があることは容易に推察されるところ

ろである。

まず、来客は、基本的には拒むことのできるものである。したがって、漱石にとって不都合な者は拒否する。これによって少なくとも来客責めという事態は防げるはずである。

次に、拒めない来客に対しては面会日を設定して、その日に限って応対するというようにする。とくに、漱石のいう「小生にインテレストをもって居る人々」に対しては、この対応が最も有効であると考えられる。

そして3番目に、教師と作家の二重生活をすることによって多忙さがいわば極限に達しているのであれば、その一方を捨てるか、それができなければ仕事の総量を減少させるという対応が考えられる。

ここにあげた三様の対応の中で、結果的に漱石が選んだのは、2番目の面会日の設定ということであった。

このように始まった「木曜会」は、毎週午後3時以降、漱石の自宅で催された。

「木曜会」が始められた明治39年10月頃の漱石の自宅は、本郷区駒込千駄木に所在した。漱石が日常的に利用したのは、東に面した六畳の書斎と、南に面した八畳の座敷であった。狭いとはいえないが広いともいえないこれらの部屋を用いて木曜会は催された。

次に「木曜会」に参集したメンバーはどのような構成になっていたのであろうか。

その主な構成メンバーはいわゆる門下生（辞書的意味でいえば、「師の門に入って教えを受ける⁽⁴⁶⁾」人で、いわゆる門人、門弟、弟子とも呼称される）といわれる者達である。その他には、親しい友人、知人が含まれる。

それらの氏名を列挙すると次のようになる。

高浜虚子、寺田寅彦、野村伝四、皆川正禧、野間眞綱、中川芳太郎、鈴木三重吉、森田草平、小宮豊隆、野上豊一郎、野上八重子、松根東洋城、阿部次郎、安倍能成、中勘助、和辻哲郎、芥川龍之介、久米正雄、内田百閒、滝田樗陰、坂本四方太等となる。

この中で、高浜、坂本、寺田、皆川、野間、野村、中川は「木曜会」発足以前にやはり漱石の自宅で月に1回ぐらいの頻度で開かれた「文章会」のメンバーであったと、漱石夫人は述懐している⁽⁴⁷⁾。

これ等「木曜会」の主なメンバーは、何時頃より漱石に接近したのであろうか。それを推測する有力な資料に漱石が送った書簡がある。

漱石の書簡は、受信した者によって比較的よく保存されている。明治22年5月13日の正岡子規宛書簡から大正5年11月19日の大谷正信宛書簡までの約2370通が現存していると酒井英行は報告している⁽⁴⁸⁾。

書簡の往来は例外はあるとしても実際の往来を予想させるものでもあるので漱石の書簡が発信された時日を以って、その受信者との交流の存在を証明する資料と考えることに、大きな誤りはないのであろう。

漱石からの最初の書簡を受け取った日時により、「木曜会」のメンバーが漱石に接近した時期を推測すると次のようになる。

最初に接近したのは高浜虚子で、明治29年に第一信（熊本市より）を受け取っている。次いで、寺田寅彦は明治33年、ロンドン留学出発の直前に受信している。

野村伝四、皆川正禧、野間眞綱は明治37年に受信。中川芳太郎、鈴木三重吉、森田草平

は明治38年に受信。小宮豊隆、野上豊一郎は明治39年に受信。野上八重子、松根東洋城は明治40年に受信。阿部次郎は明治42年に、安倍能成は明治43年に、そして中勘助は明治44年に受信している。

大正時代に入ると、2年に和辻哲郎、5年に芥川龍之介、久米正雄がそれぞれ最初の書簡を受け取っている。

以上に氏名を列挙した者の中で、高浜虚子を除けば、他はすべて漱石の門下生と呼ばれる者達である。

しかし門下生と呼称されるとはいえ、世代的にみるならば、寺田寅彦の世代と芥川龍之介、久米正雄の世代では大きな隔りがある。世代の違いは、意識、思想の違いにも関係するであろう。

また、専攻分野でみると、寺田寅彦のみが理学（物理学）で別格であるにしても、同じ文科系といっても人文科学、社会科学に分かれ、更にその中でも細分化されるということになり、資質、能力において多種多様なメンバーであるといえよう。

それ等のメンバーが「木曜会」の午後3時以降に、その主宰者である漱石の自宅に集合し、懇親の場を共有したのである。もちろんメンバーの目的は、メンバー相互の親睦ということよりも、漱石という、それぞれにとって尊敬すべき、そして同時に慕しい人物との接触ということにあった。

一方、主宰者である漱石としては、メンバーに対して会の趣旨を示し、その趣旨に参同する者を集合させて、趣旨を実現するために種々の企画を立て、実行するという立場ではなかったから、その時々々の雰囲気に合わせて自由な展開をリードすればよいのであった。

とはいえ、一般的に言えば、この集団は、明らかに知的エリートの集団であり、それ故、メンバーの各々は、意識も自負心も強いので、その集合体を運営するには多くの困難も予想されるのである。にもかかわらず、十年余りにわたり大きな破綻もなく継続された理由は何に求められるのであろうか。

結論的に言えば、それは漱石が常に漱石であったということにあった。「木曜会」としては、約十年継続したのではあったが、そのメンバーは常に同じというわけではない。先にあげたように書簡を受け取った時期の違いからそれは明らかである。早い時期より漱石に接近した者が長い期間にわたり「木曜会」に参加したことは当然のことではあるが、それは漱石が参加年数が長い者を特別扱いした結果によるものではなかった。年数や回数に関係なく漱石は常に変わらぬ漱石として、個々のメンバーを尊重しつつ対応したということである。

そのことが、メンバーの一人ひとりにとって、漱石は自分の敬慕する先生、まさに自分の先生という確信を抱かせることにつながり、「木曜会」に向かわせる思念となったといえるのである。

次に漱石が明治39年10月21日に森田草平に宛てた書簡の一部を紹介する。

「木曜日には、サボテン党の首領（虚子氏）は鼓の稽古日だとか云って来なかった。呑気なものである。其代り中川のヨ太公（芳太郎一筆者注）、鈴木三重吉、坂本の四方太、寺田の寒月（寅彦一筆者注）の上に、東洋城（松根一筆者注）という法学士が来た。この東洋城というのは、昔僕が松山（愛媛県尋常中学校一筆者注）で教えた生徒で、僕の家へ

来ると、先生の俳句はカラ駄目だ、時代後れだと攻撃する俳諧師である。先達来て、玄関に赤い紙で面会日杯と張り出すのは、甚だ不愉快である。「僕のために遊びにくる日を別にこしらえて下さい」と、駄々っ子見たような事を云うから、そんな事を云わないで、木曜日に来て御覧と云ったら、とうとう我を折って来たのである⁽⁴⁹⁾。」

この書簡は、「木曜会」が発足して間もない時期のものである。それだけに、参加したメンバーの数も少ない。当初は十人に満たなかったこともあってか、一人ひとりに対する漱石の愛着の深さも格別で、それは名前や愛称、エピソードによるメンバー紹介の仕方にも表れている。

その上、虚子が鼓の稽古日を理由に来なかったこと、松根東洋城は俳句の上では自分が先輩といわぬばかりに漱石の俳句を酷評するだけでなく、自分の為に面会日を別に設けよと注文することまで紹介しているのは、メンバーが漱石に対して示す思いや態度をうかがわせるものでもある。

虚子は漱石の門下生というべき立場ではないから、自分の都合を優先するところがあったとしても止むを得ないとしても、松根東洋城は、愛媛尋常中学時代に漱石に英語を教わった者であるから純然たる門下生である。それを考えると信じ難い態度である。俳句では先輩だと思うのもそれは自己評価に過ぎない。それを漱石はむしろ楽しげに許している。

「木曜会」がもともと漱石に強い関心を持つ者達によって構成される集団である以上、そこで展開される話題も漱石に集中するのが自然である。とくに、自宅を本郷区千駄木から明治39年12月に本郷区西片町に移し、さらに40年9月に早稲田南町に移すと、そこは生地である牛込馬場下横町に近いこともあり、話題の中心は漱石の追憶談となることが多かった。それはメンバーにとってもきわめて興味ある話題であった。地域の話、祖先の話、両親兄弟の話、自身の生い立ちなど思い出すままに話すのをメンバーは傾聴したのである。

加えて、漱石は座談が巧みであった。メンバーの一人である森田草平は「先生の座談の巧さは、やはり先生自身が純粋な江戸っ子で一江戸っ子で教養のある人というものは、大抵話が巧い一少年時代から寄席へ通い、日本橋瀬戸物町の伊勢本へは毎日の様に好んで講談を聞きに出掛けられたと云うから、一つはそんな所からも来ているのではあるまいか⁽⁵⁰⁾」と推測している。この推測は、漱石が「僕は決して重厚な人間ではない、薄っぺらな、へらへらな人間だよ⁽⁵¹⁾」とよく云っていたことから裏付けられるとしている。

さらに森田はメンバーが漱石にひきつけられた理由、つまり魅力を次のようにとらえている。

「先生の前では自由に思うことが云われた。そして何を云っても理解して貰えた一叱られることはあっても、誤解される恐れはない。のみならず、思いも寄らぬ暗示を受けて、こちらにその気さえあれば、いくらでも啓発される、ぐんぐん蒙を啓いて貰える。これが私どもの先生に惹附けられた最大の魅力であった⁽⁵²⁾」というのである。

漱石は森田に限らずメンバーの誰に対しても自由に発言させた。そして、発言内容を理解した。しかし、理解するということは、そのまま肯定すること、同感することを意味しない。もし、そのまま肯定され、同感されるのであれば、森田のいう「啓発」、「蒙を啓」かれるということは起り得ない。

漱石はメンバーに自由に発言させた上で、その反対の観点に立つ意見を返したという。

つまり、物には両面があり、一面だけでとらえることには限界があることを示すという姿勢をとることにより、反省や自覚を促したということである。漱石自身、次のように述べたことがあるという。

「元来僕には物の反面を見る癖がある。変なことを云われると、同時にその裏が眼に附いて敵わない。物には必ずその反面がある。一つの物でもその人の立場に依っては多種多様に見える。その一面ばかり抱泥して、これが真理だと他を排撃してはならない⁽⁵³⁾」と。

「木曜会」における話題は、その時のメンバーにより自然に決まっていっていき、その場における漱石の態度もその場の雰囲気により自在に変えられていったといつてよいであろう。

結 言

以上によって、夏目金之助という一教師が学校という職場で、生徒・学生の対して見せる姿や態度はある程度明らかになったといえるであろう。

しかし、学校という職場で彼に接した生徒・学生の数には多数であるのに対して、現時点でそれら多数の生徒・学生に接触し資料収集することは不可能であり、結局、ごく限られた者達によって残されている資料による他はなかった。その点で大きな限界を持つことを認めざるを得ない。

一方、「木曜会」における夏目金之助は、自宅においた会であるため、接する者達の数には自ら限定される。しかも学校においては公人であるが、自宅においては私人であるため、公人としての姿との差異がそこに見られることに気付かされる。したがって、本論によって教師夏目金之助の公人と私人という二面のそれぞれの面における師弟関係の特性を限界はあるものの明らかにし得たと考える。

(注)

1. 眞鍋嘉一郎…東大医学部卒、物理療法で有名な臨床医学者で、漱石の主治医。
2. 『スケッチ・ブック』, Washington Irvingの“The Sketch Book”を指す。
3. 眞鍋嘉一郎, 松山時代, 文豪夏目漱石所収, 春陽堂, 大正10年, 27頁。
4. 同前書, 29頁。
5. 松根東洋城, 本名は豊次郎, 京大卒, 夏目漱石に師事。俳人で、「東洋城全句集」など。
6. 松根東洋城, 先生と俳句と私と, 文豪夏目漱石所収, 春陽堂, 大正10年, 235-236頁。
7. 同前書, 235頁。
8. 同前書, 234頁。
9. 速水滉, 東大卒。第一高等学校教授, 京城帝国大学総長を歴任。主著に『現代の心理学』, 『論理学』がある。
10. 『フレンチ・リヴォリューション』, Edmund Burkeの“Reflections on the Revolution in France”を指す。
11. 速水滉, 熊本時代, 文豪夏目漱石所収, 春陽堂, 大正10年, 36頁。
12. 同前書, 36頁。
13. 『ハムレット』はWilliam Shakespeareの作品で, 主人公Hamletの悲劇。
14. 速水滉, 前掲書, 36頁。
15. 同前書, 36頁。
16. 同前書, 37頁。

17. 同前書, 37頁。
18. 内丸最一郎, 東大卒, 東大工学部長。
19. 高等学校の二部とは, 理・工などの理系を指し, 一部は法・文などの文系を指す。辰野隆, 忘れ得ぬ人々, 鬼怒書房, 昭和22年, 47頁。
20. 内丸最一郎, 熊本時代, 文豪夏目漱石, 春陽堂, 大正10年, 39頁。
21. 同前書, 39頁。
22. 同前書, 39-40頁。
23. ジョン・ハリファックス『ジェントルマン』, 著者不詳。
24. ジェイムズ『オブ・イングリッシュ・ブローズ』。著書ジェイムズは, アメリカの哲学・心理学者のJames. Williamか?
25. 内丸最一郎, 前掲書, 40頁。
26. 同前書, 41頁。
27. 同前書, 41頁。
28. 松浦一, 東大卒, 英文学者。
29. 小泉の後任に就任する経緯は, 拙稿(「教師夏目金之助の研究(Ⅱ)」, 明星大学教育学研究紀要第10号, 1995年, 19頁)ですでに紹介した。
30. 『英文学形式論』は, 夏目漱石述, 皆川正禧編として, 岩波書店より大正13年に発行された。
31. 『文学論』は夏目金之助著として大倉書房より明治40年に発行された。
32. 松浦一, 大学教授時代, 文豪夏目漱石所収, 春陽堂, 大正10年, 60頁。
33. 同前書, 61頁。
34. 同前書, 61頁。
35. 同前書, 63頁。
36. 野上白川, 本名は豊一郎。東大卒で野上八重子の夫。英文学者, 能の研究者としても知られる。法大総長を経験。
37. 野上白川, 大学教授時代, 文豪夏目漱石, 春陽堂, 大正10年, 66頁。
38. 同前書, 66頁。
39. 『十八世紀英文学史』は, 夏目金之助著『文学評論』として, 春陽堂より明治42年に発行された。
40. 野上白川, 前掲書, 71頁。
41. 同前書, 76-77頁。漱石, 漱石全集第28巻所収, 岩波書店, 1980年, 178-179頁。
42. 森田草平は, その著「夏目漱石」(甲鳥書林, 昭和18年, 6頁)において, 「木曜会—そんな会の名がある訳ではない」という言い方をしている。
43. 根本正義, 鈴木三重吉と「赤い鳥」, 鳩の森書房, 1973年, 30頁には, 面会日設定の提案者は, 鈴木三重吉とある。
44. 夏目鏡子述, 松岡譲筆録・漱石の思い出, 文春文庫, 1994年, 124頁。
45. 漱石, 漱石全集第27巻所収, 岩波書店, 1980年, 264頁。
46. 新村出編, 広辞苑(第五版), 岩波書店, 1998年, 2664頁。
47. 夏目鏡子述, 松岡譲筆録, 漱石の思い出, 前掲書, 165頁。
48. 酒井英行, 書簡, 国文学—夏目漱石を読むための研究事典所収・学燈社, 昭和62年, 112頁。
49. 漱石, 漱石全集, 第28巻所収, 岩波書店, 1980年, 110-111頁。
50. 森田草平, 続夏目漱石, 甲鳥書林, 昭和18年, 441頁。
51. 同前書, 441頁。
52. 同前書, 445頁。
53. 同前書, 434頁。

※引用文中の旧漢字旧仮名づかいはそれぞれ新漢文, 新仮名づかいに改めたことをことわっておきたい。